

酸素カフエテリアと死者の町

ネクロポリス

—— 大衆情報消費社会における酸素マスク表象 ——

原 克

窒息するカフカ

カフカの世界は息苦しい。男たちはみな呼吸困難に陥り
そうだ。

『ある戦いの記録』（一九〇九年）で「僕」は、ゆきずり
の太った男とつれだつて夜の街路を歩いた。¹ 突然、男は
転落して「轟々たる滝の急流にのまれて、姿を没してしまっ
た」。岸辺に残された僕は大声で叫んだ。「僕たちの肺臓は、
どうしたらよいのだ」。「早く呼吸すると、肺臓はそれ自身
で、自分の内部の毒のために窒息してしまう。ゆっくり呼
吸すると、吸いきれない空気のために、激昂した事物のた
めに窒息してしまう。自分に合った早さを探そうとすると、
探すだけで窒息してしまう」。冬のプラハの夜気に包まれ

ても、過敏な詩想は息が詰まるのである。

長編『城』（一九二二年）で測量士Kは、全貌のつかめな
い城に向かう。² しかし、永遠に辿り着けない城は迷宮の
世界だった。Kは思った。「自分は道に迷っている」、「遠
い異郷へ来てしまった」のかもしれない。ここでは「空気
さえも故郷の空気と成分がまったく違い」、「その異質な空
気のために息がつまりそうだ」。それでいて、「その妖しい
誘惑にたぶらかされ」、このまま「道に迷い続けなくては
ならないのだろう」。果たして、Kが城に辿り着けたかど
うかテキストは明かしていない。未完に終わってしまった
のである。

『審判』（一九二五年）でヨーゼフ・Kは突然逮捕され、
わけの分からない訴訟に巻き込まれる。³ 裁判手続きにつ

いて助言を得られるというので、法廷画家ティトレリのアトリエを訪れた。天井裏の小部屋にはろくな窓もなく、「ほとんど息もつけないほど澱んだ空気」だった。Kは「次第に息苦しく」なると、「目まい」ばかりでなく「頭痛」さえしてきた。「空気に追いつて立てられるように」、ハンカチを口にあて出口に向かったが、「歩くというよりむしろよろめいていった」。

最初の予審会場は、人いきれのせいかわず気と薄暗がり「に包まれ」「空気が澱んで」いて、「ひどく鬱陶しかった」。翌週、再び出かけた。裁判事務局は屋根裏にあつた。薄暗い廊下を歩くと、「気分が悪くなった」。熱せられた屋根のせいで、「空気が澱んで重くなっている」のだ。「もう息もつけないほど」に「胸苦しさを覚えた。廊下がぐらりと揺れている。まるで「船酔い」だ。ようやく出口にたどりつく」と、「壁が裂けたかのように、新鮮な空気がどつと流れてきた」。すると「体中の力が一挙に戻ってきて、自由の前触れ」のように思われた。しかし、結局ヨーゼフ・Kに真の自由は訪れなかった。逮捕から一年後、郊外の石切場で「処刑」されたのである。彼はつぶやいた。「まるで犬のようだ！」恥辱だけが生きのびてゆくかのようにだった。「僕」も「測量士K」も「ヨーゼフ・K」も、みな重く

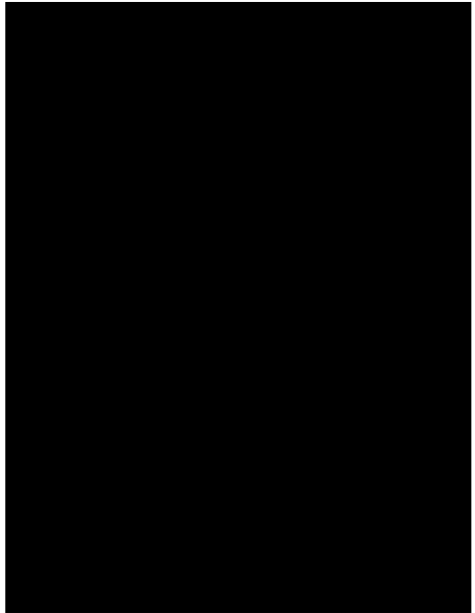
澱んだ空気に窒息している。ここで窒息は、もちろん存在論的危機の換喩である。新鮮な空気に触れたからといって、癒されるものではない。仮に酸素マスクがあつたところで、カフカの危機は救われなかったことだろう。

救急隊が到着するまで

作家の精神は救われなかったかもしれないが、市民の身体は救うことができた。

米科学雑誌の権威『サイエンティフィック・アメリカン』一九一〇年一月一日号は、生命現象にとって「最も不可欠な要素」である酸素について報告している。「酸素と人間のエネルギー」という特集記事だ。⁴ 記事は酸素を、「食料以上に生命維持にとつては欠かせない」ものだと位置づけたうえで、最新の酸素研究を紹介している。例えば、「体内の酸素バランスが崩れると」、運動機能が低下したり、病気症状を呈する。とりわけロンドン病院附属研究所では、酸素ボンベから酸素を吸入した後、被験者の運動機能と作業効率が上昇することを検証した。【図1】

イェール大学のアンダーソン教授は、メキシコにあるポカテペトル山とイスタシワトル山との比較登山で、酸素と運動機能の関係を証明してみせた。登山隊を二つ結成し、



【図1】科学雑誌の表紙を飾るロンドン病院附属研究所レオナルド・ヒル博士。

一方の隊には、酸素ボンベなしで「比較的容易なポポカテペトル山」に登らせ、もう一方の隊には、「峻険なイスタシワトル山」に酸素ボンベを装着して登らせたのである。結果、イスタシワトル山の登山隊の方が、「高山病も知らず」スムーズに登頂に成功した。教授は実験の結果を、米国内物理教育学会に誇らしげに報告している。酸素は人体の運動機能を活性化するのである。

酸素が欠かせないのは登山家だけではない。鉱山労働者はさらに切実だった。直接生命に関わるからだ。『ポピュラー・サイエンス』一九二二年六月号の記事「ブリキの缶

詰から酸素」は、炭坑夫への福音を伝えている。⁵ 携帯用の簡便な酸素ボンベが登場したのである。落盤事故が起きると、坑内に閉じ込められた坑夫の多くは酸素不足で生命を落とす。そんな悲劇を回避するため、今般、米国内鉱山局が「緊急用呼吸キット」を開発したという。緊急時、ブリキの缶詰に似たキットを口に咥える。内部の化学物質が「呼吸から二酸化炭素を除去し、酸素含有量を増加して、吸引可能な気体に変換させる」。このキットで「およそ数時間」呼吸が維持される。「救助隊が到着するには十分」だという。

事故は炭坑だけで起こるわけではない。火事や災害はどこでも起こりうるのである。そんなとき救急隊の救命活動では、最初の処置が大事だ。『ポピュラー・サイエンス』一九三〇年八月号の記事「自動装置でガス被災者を救助」は、救急隊員への福音を伝えている。事故現場に携帯できる酸素マスクキットが登場したのである。今般、英国バーミンガム消防局では「一酸化炭素中毒患者」を「事故現場で処置」できるよう、救急キットを導入したという。「人工呼吸セット」、「心臓・腹部マッサージ器」、「酸素ボンベ」一式をトランクに詰めたものだ。スイッチひとつで自動的に作動する。災害救助に酸素マスクは欠かせなくなったの

である。

病院に担ぎ込まれてからも酸素マスクは重要だ。『ポピュラー・サイエンス』一九三七年五月号の記事「酸素テントに代わる鼻マスク」が、院内処置の効率化をレポートしている。⁷ これまでも病院では酸素テントを使っていたが、蚊帳のように大型で「嵩張るもの」だった。そこで今般口サンゼルス病院では、患者の頭部だけをカバーする「セルローズ製の小型テント式酸素マスク」を開発したという。これだと、従来のものより「酸素消費量がおよそ三分の一」で済み、「操作も簡単だ」。更に「患者の鼻孔に挿入するタイプ」も考案した。ゴム製チューブを直接、酸素ポンベに接続する方式である。吸引量は看護師がポンベのバルブを微妙に調整しておこなう。院内治療もますます機械化してゆくのだった。

シャンゼリゼ通りのカフェテリア

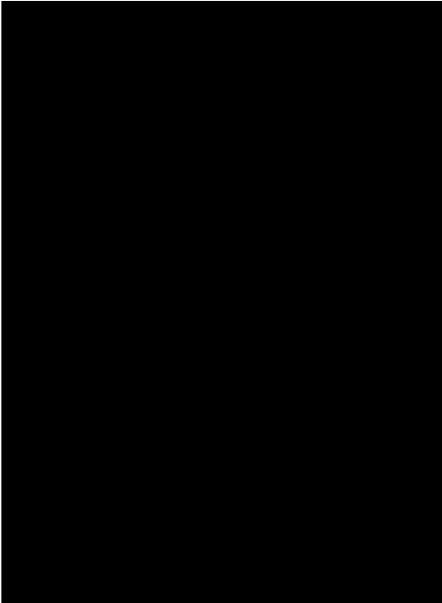
ヨーゼフ・Kならずとも船酔いは始末の悪いものだ。大観光時代、船に不慣れな市民も船旅をするようになった。そんな旅人に強い味方が登場したと、『ポピュラー・サイエンス』一九二八年二月号は報じている。「ガスが船酔いを癒す」という記事である。⁸ この装置はドイツ人医師が

考案したもので、ポンベから「酸素と特殊なガスを混合したもの」を吸引させるタイプだ。ゴム製チューブの先の吸引マスクは円錐形をしており、「エーテル・コーン」と呼ばれる。旅人はこれを鼻部にあてて深呼吸をするだけでよい。医学的根拠には言及していないものの、「これまでアメリカ大陸に向かった多くのドイツ人観光客が、この装置で救われた」と、記事はその効果を謳いあげている。

戦争が技術開発を促進する。不幸なことではあるが、これは一面で事実だ。酸素マスクの改良過程も例外ではない。『ポピュラー・サイエンス』一九四三年一月号は特集「ニュー・ファッション」を組んで、最新の航空機用酸素マスク・システムを紹介している。⁹ 記事の副題は「最新式の酸素マスクで、わが軍の飛行士はいかなる高度でも枢軸軍に挑みかかる」と宣言している。技術的要点は「全自動調節システム」だ。「飛行高度により「気圧は刻々と変化」してゆく。それに応じて「酸素供給量」も変化させなくてはならない。吸引する酸素の過不足は運動能力に影響を与え、戦闘時にはたちまち生命の危険につながるからだ。戦後も酸素マスクはますます社会に浸透していった。『ポピュラー・サイエンス』一九四六年二月号の記事「アムフト酸素タンク」が、その平和利用を言祝いでいる。¹⁰

ジョージタウン大学アメリカン・フットボール部では、昨シーズンから試合中に酸素ボンベを導入した。二本のボンベに十一個のマスクが装着されている。激しいプレーの後でも、呼吸数は「三〇秒で回復する」という。

戦後のストレス社会、街頭には酸素カフェテリアが登場した。『ポピュラー・メカニクス』一九六〇年九月号の記事「酸素を一息いかがですか？」が、パリのOL事情を伝えている。¹¹ 今般シャンゼリゼ通りに「酸素自動販売機」がお目見えしたという。【図2】仕事帰りのOLに大人気



【図2】シャンゼリゼ通りの「酸素カフェテリア」。街頭に現れた科学神話のかたち。

とか。「一フランで二〇リットルの酸素」が楽しめる。手軽にリフレッシュして、アフターファイブへの活力を養う。疲労回復も、万事パリはオシャレということか。記事の筆致もどこか軽快だ。なるほど砂漠のような都市生活、パリのOLにとってそれは小さなオアシスだったのかもしれない。しかし、その軽妙なアイデアの中にこそ、ストレス社会の根深さを垣間見る思いがする。カフカならずとも。

死にむかう空間の兆し

ギリシア七賢人タレスは「空気」「火」「土」「水」を四大元素と呼び論考の対象にした。タレスのみならず、古来、空気は世界ならびに自然を構成する必要不可欠な要素と考えられてきた。中世の錬金術も空気を重要な研究対象ととらえてきた。しかし、そこに見られる空気表象は必ずしも科学的とはいえないものだった。そして近代、科学的探求を経て空気の組成は解明され、二〇世紀にいたると、人びとは酸素マスクという道具を介して空気との間に新しい関係性を結ぶようになった。空気を科学的に制御する手段を手にしたのだ。それは一見、科学による迷信打破、脱宗教化のようにもみえる。

なるほど、それは科学の勝利と呼びたくなる成果とい

えるかもしれない。しかし、ことはさほど単純ではない。科学的解明によつて、前近代的な空気象の神話性が駆逐されたわけではないのだ。酸素マスクの登場と共に、そこには新たな神話圏が成立してきたのである。それは、全能的なる科学という神話であり、科学で自然を制御できるといふ神話である。

ここで近世初期に成立した地下表象を見てみよう。ある詩人が想い描いた地下世界のイメージである。

人生のなかば、正しき道を失い、気がつけば名も知らぬ暗い森に迷いこんでいた。そのとき、古の詩人ヴェルギリウスがあらわれた。進むべき道を決めかね、寄る辺なく足をすくませる私に、詩人の誉れは言った。「されど汝は、いかなればあらゆる喜びの始めまた源なる幸の山に登らざる」。なぜ、お前は詩神の高みを目指さぬのか。なぜ、地獄と煉獄のはてにある天国を目指さぬのか。古の詩人はしばし考えこみ、静かに言った。「我は汝の導者となりて汝を導き、こゝより不朽の地をめぐらむ」。禍をまぬがれ、幸なる民に加わるため、私は詩人につきしたがう決心をした。「この時彼進み、我はその後方に従へり」。艱く廢れた路をゆくと門があった。その頂きに、言葉が黒々と記されていた。「我を過ぐれば憂ひの都あり、我を

過ぐれば永遠の苦患あり、我を過ぐれば滅亡の民あり」。それは地獄の門だった。山肌に穿たれた、ほの暗い門の奥に地獄があるのだ。最後の言葉が告げていた。「汝等こゝに入るもの一切の望みを棄てよ」。

いわずとしたダンテの『神曲』（一二三〇七―二一年）である。¹² 第三曲「地獄の門」の情景だ。このあと「私」ダンテは、尊崇する古代ローマ最大の詩人ヴェルギリウスに導かれ地獄八景を巡覧する。第一の獄から第九獄の水結地獄まで、そこは、嘆きと悲しみの声、はげしき叫喚、異様の音、罵詈の叫び、怒りの節、苦患の言があふれる「秘密の世」だった。決して果てることのない地獄、それはまさに不朽の地下世界であった。

ダンテからおよそ六〇〇年後、ルイス・マンフォードは名著『技術と文明』（一九三四年）で、地下世界を「環境」の隠喩として読み解いた。¹³ 第一次産業革命時、鉱山が獲得したあたらしい文明的記号性の重要さを説いたのである。およそ世界はどこであれ、食物なり、水分なり、空気なり、なんらか生命に直接転換できる有機物質とかかわっている。しかし、ひとつだけ例外があるというのだ。曰く、「坑夫の環境だけは完全に無機的である」、「食べられるものは全く何もない」。鉱山では、有機的な自然はいっさい

追放されているのだ。鉱山とは、「人が作り出してかつ住むことになった完全に無機的な環境として最初のもの」であり、「恐怖そのものの形」であふれている。そこでは、「昼は追放され、自然のリズムは破壊された」。これぞ、『作られた環境』の極致である。つまり、そこは有機的なものが無機的なものによって人為的に、おきかえられた究極の場所に他ならない。

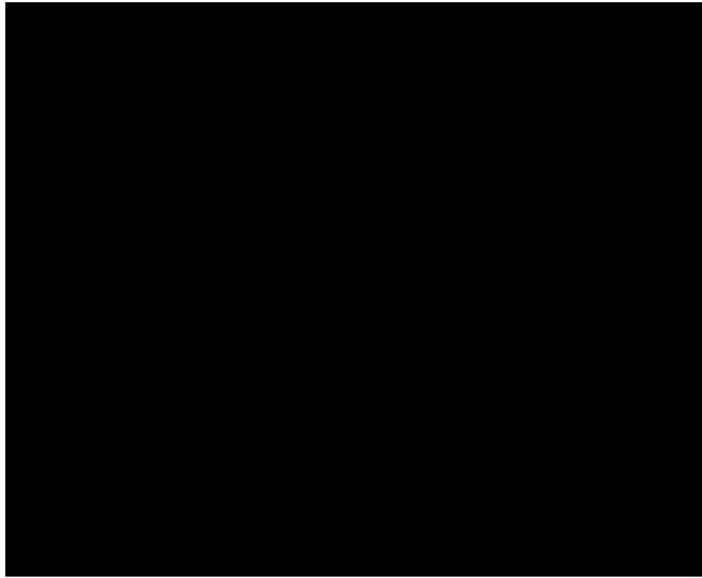
しかも、この人工環境は、みずからの内に反自然をかかえこんでいるがゆえに、必然的に荒廃し、やがて死にむかわねばならない。それは、オズワルド・シュペングレーが『西洋の没落』（一九二八年）で、近代的大都市を評して、「機械的無味乾燥の最終段階」と否定的に断じたところと通底している。¹⁴ 大都市はやがて巨大都市になり、その反自然ゆえに死者の町にならざるをえない。マンフォードの慧眼は鉱山の人工性に、死にむかう空間の兆しを嗅ぎとっているのである。

機械仕掛けと自然

ダンテの『神曲』の地獄、マンフォードが解説した鉱山。いずれも地下世界である。しかも、両方とも死の国である。しかしながら、ふたつの死の国を囲繞している言説の枠組

みはまったく違っている。なるほど、ダンテの地獄は苦難に満ちた空間であるが、しかし、そこは同時に詩神の国、幸の国に通じる世界でもある。ダンテの地獄行は、あくまでも至福の位階に到達するための巡礼行に他ならない。詩神をめざす詩の学徒が通過しなくてはならない、神聖な道行きなのである。それに対して、マンフォードが解説した地下世界は、あらゆる自然を排斥した、機械仕掛けが専横する空間であり、その先に幸の国の兆しはみえない。それ自体、埋葬された死者の町なのである。

しかも、ダンテの地獄は、伝統的な地獄表象を継承しつつも、詩人の構想力が生みだした仮構の物語世界なのだが、マンフォードの鉱山は、科学的知見を背景に、現地ルポに立脚した現実世界の分析的再構成なのだ。かたや十四世紀の詩的表象、かたや二〇世紀の文明論的分析。この両者の間には、じっさいに鉱山掘削技術の進展という世界的経歴値がよこたわっている。鉱山開発という実体験、そして、それらを可能にした技術革新たち。酸素マスクや通風口施設、掘削機や非引火性照明など。【図3】こうした具体的な機材がハードウェアとして登場し、それらを介して新しい地下世界のイメージ圏が、近代的な地下世界像というソフトウェアとして立ちあがってきた。こうしたことどもが、



【図3】落盤事故救助隊が非引火性ランプを設置する。1928年

ダンテとマンフォードの地下世界表象の前縁を形成しているのである。ひとくちに地下世界といっても、その表象の

ありようは、それらを圍繞する言説の枠組みになんらかの
かたちで規定されているのだ。

さて二〇世紀の酸素マスク表象である。医療用として、
高山登頂用として、はたまたストレス解消用として、二〇
世紀大衆社会にゆきわたった酸素ボンベ。いずれも、炭鉱
のもつ「埋葬された死者の町」というほどの禍々しさはな
い。むしろ、小回りが効いて実効的で、場合によっては清々
しささえ想起させる実用品ばかりである。しかし、そうし
た軽快な表層イメージとは違い、酸素マスク表象の深層部
分には抜きがたい確信が潜んでいる。それは、機械仕掛け
が自然を制御するし、制御しなければならぬという確信
である。

科学神話の時代

科学の進歩とは脱迷信あるいは脱宗教のことである。一
般にはそう考えがちだ。確かに、そうした側面もある。し
かし同時に、科学情報それじたいが「現代の神話」や「現
代の迷信」として作用してしまう。そんな事態がおこるの
である。

アインシュタインの光子量子仮説は、本来、純然たる理論
であった。ところが、先進性や利便性といった、市民社会

の欲望や比喩と接合して語られた瞬間、現代の神話になったのである。実際、二〇世紀初頭の一般大衆は、メディアを通じて光子仮説を知るや、それ以降、光エネルギーが電気エネルギーに変換するという物理現象を、未来志向の文脈から外してイメージすることが困難になってしまった。それは、肯定的にみれば、想像力の喚起ということにつながるかもしれないが、批判的にみれば、イメージをある特定の方向にリードすることとも言える。

ロラン・バルトによれば、神話というものは、語られる内容によって決まるのではない。それを語る「語り口」によって決まるのである。これを語れば神話になるという、固有の内容があるわけではない。どんな内容であれ、それをメッセージとして発信するやりかたが、神話的か神話的でないかという別があるにすぎない。神話は形式であって内容ではないのだ。従って、現代科学も神話的に語られるのであり、つまりは神話になりうるのである。

酸素マスクも同断である。なるほど、近代生理学や物理学により、空気の組成は科学的に解明された。学的知識として整合性をたもちつつ、その正体が明らかにされたことは間違いない。しかし、そうした正確な科学知識が、いったん「情報」としてメディアに載ると事態は急変してくる。

メディアの「語り口」により、酸素マスクも、なにか厄災を払いのけてくれるもの、苦難を排除してくれるありがたいもの、こうしたイメージと分かちがたく癒合してしまうのである。そこから、酸素マスクを生み出した科学知識・科学技術はありがたいものであり大したものである、こうした想念にゆきつくのはあと一歩である。この想念は、正確な科学知識からできていたというよりも、むしろ市民的倫理観や社会通念を基体とした「時代の欲望」に基づいているといつてよい。科学的言説を身に纏いながらも、それはきわめて情動的な表象世界である。これこそが二〇世紀大衆がいだく科学表象の構造である。

科学表象・科学イメージは現代の神話として作用する。科学ジャーナリズム、なかでも「ポピュラー系科学雑誌」が果たした役割は大きい。せまい専門家集団むけの研究論文とはちがひ、科学知識をひろく一般大衆に伝えることを目的とした情報ツールだからだ。特徴はその「語り口」にある。最先端の知識を正確におさえつつも、エピソードを添えるなど、一般読者の受容傾向にたいする配慮がなされているのである。「分かりやすく書く」(Written so you can understand it)。つまり、その時代の関心や知的水準、嗜好や欲望を敏感にかぎわけ嗅覚がはたらいているのだ。

そして、ほかならぬ「語り口」へのこうした配慮こそが、表象分析の立場からすると、時代の欲望をあぶりだす触媒の役割を果たすことになる。

米国では『サイエンティフィック・アメリカン』（一八四五年創刊）、『ポピュラー・サイエンス』（一八七二年他、ドイツでは『科学技術総覧』（一八九六年）、『知識と進歩』（一九二六年）他、日本では『科学知識』（一九二一年）、『科学画報』（一九二三年）等々、ポピュラー系科学雑誌は、二〇世紀をつうじてかたときも休むことなく、ひとびとに最新の科学情報を「分かりやすい語り口」で伝えつづけた。ポピュラーサイエンス、それは科学神話の生産システムである。科学の時代でもあり、大衆の時代でもある二〇世紀を多面的にとらえるには、またとない重要な歴史資料である。もちろん酸素マスク表象についても、ポピュラーサイエンスが果たした役割は計り知れない。なるほど、ヨーゼフ・Kの存在論的危難を救出するのに、酸素マスクを持ちださなかったカフカのような精神は二〇世紀においても存在するのだけでも。

【註】

1 フランツ・カフカ『ある戦いの記録』（所収「決定版カフカ全集

2 「前田敬作訳、新潮社、一九九二年）

2 同上「城」原田義人訳、角川文庫、一九七二年

3 同上「審判」（所収「決定版カフカ全集5」中野孝次訳、新潮社、一九九二年）

4 John B. Huber: Oxygen and Human Energy. in: Scientific American. A Popular Illustrated Weekly Of The World's Progress, January 1, 1910, New York, p.6.

5 Oxygen from Tin Can. in: Popular Science Monthly. June 1921, New York, p.50.

6 Gas Victim Saved by Automatic Machine. in: Popular Science Monthly. August 1930, New York, p.33.

7 Nose Mask Replaces Oxygen Tent. in: Popular Science Monthly. May 1937, New York, p.56.

8 Gas Cure for Seasickness. in: Popular Science Monthly. February 1928, New York, p.55.

9 Something New in Fashions. in: Popular Science Monthly. November 1943, New York, p.77.

10 Gridiron Oxygen Tank. in: Popular Science Monthly. December 1946, New York, p.85.

11 How About a Breath of Oxygen For an After-Work Pick-Me-Up? in: Popular Mechanics Magazine. September 1960, Chicago, p.145.

12 ダンテ『神曲（上）地獄』山川丙三郎訳、岩波文庫、一九九四年

13 ルイス・マンフォード『技術と文明』生田勉訳、美術出版社、一九七二年

14 オズワルド・シュベングラー『西洋の没落―世界史の形態学の素描』村松正俊訳、五月書房、一九七一年